

1975年から1979年までの四年間、カンボジアで何が起こっていたのか、皆さんはご存じでしょうか。

カンボジアでは、1970年から内戦状態が続いていました。ポルポト政権下では多くの人々が、男性・女性・子供別に集団生活を強制され、朝から晩まで農作業などの屋外での労働を課せられました。そのように体を動かして働くことのみが許され、知識のある人々は殺されました。医師や技術者、教師など、およそ200万人の大量虐殺が行われたそうです。また共産主義であったポルポト政権は、教育は敵対する資本主義を教え込む元凶とし、それまであった学校を破壊、教材や本を焼却しました。そうして、カンボジアの教育基盤は完全に崩壊したのです。ポルポト政権が失脚した後、生き残った人々によって教育の立て直しが行われましたが、学校や教材が不足していただけでなく、教師もほとんどいませんでした。

しかし、そのような状況におかれたカンボジアの教育を支援し始めた団体がありました。東南アジア文化支援プロジェクト、通称CAPSEAです。

CAPSEAは今に至るまでフランス語や英語、また日本語の絵本や教科書をカンボジアの子供たちのために、クメール語に翻訳するという活動を続けています。

そうしてつくられた絵本や教科書は、図書館や移動図書館に所蔵され、子供たちが自分で読んだり、スタッフに読み聞かせてもらったりすることで、カンボジアの子供たちの道徳教育に役立てられています。またそのほかにも、CAPSEAは小中学校の建設事業などに尽力してきました。

昨年度、図書委員会はCAPSEAを支援先の一つとし、古本市で得られた収益金の一部をお渡ししました。私は、収益金をお渡しするために、CAPSEAの代表であるペン・セタリンさんが経営なさっているレストランを訪れました。1974年に国費留学生としてカンボジアより来日したセタリンさんは、ポルポトの政変により難民となりました。その後、日本でレストランを経営しつつ通訳や翻訳の仕事をなさいました。現在はカンボジアでの活動にも尽力なさり、大学教授やCAPSEAの代表をされています。

セタリンさんは、カンボジアの子供たちの置かれている現状について、お話してくださいました。カンボジアにおける教育制度は、日本と同じで小学校六年間、中学校三年間、高校三年間というシステムです。人口の八割以上の子供たちは小学校に通いますが、十五歳以上の就学率は約50%に下がってしまうそうです。教育費は無料ですが、制服や文房具などは各自で用意せねばならず、給与の低い教師に対して現金を支払う機会が多くあるために、学校に通うことができなくなる子供たちもいます。そのように、カンボジアでは子供を中学には通わせず、働かせる親も多いのだそうです。しかし、子供が働き始めると親は働かなくなり、子供だけで家計を支えることとなります。親が働いていたとしても貧困により学校に行くことの出来ない子供たちも多くいます。いまだに農村に暮らす人々の中には、文字の読めない人もいます。彼らは学校に通えなかったので文字を読めず、仕事のために役立つ勉強の機会にも恵まれませんでした。そうして、大人になっても低賃金の仕事にしかつせず、子供が生まれてもその子に学校教育を受けさせる経済的余裕はなく、子供にも労働をさせなければならないという悪循環が続いています。カンボジア政府はその状況を長いあいだ問題視せずにはいません。最近では少しずつ子供が働かなくてもすむように取り組み始めていますが、それでも働いている子供はまだ大勢いるのです。

また、セタリンさんたちの働きかけなどによって、教育の大切さを知った子供たちは、ある方法で教育の機会を得ているのだと知りました。貧困層の子供たちは、教育を受けたいと思っても、公立の学校に通うことさ

えできません。

そのため、勉強するために出家してお坊さんになり、仏教学校に通う子供たちがいるのだそうです。お坊さんになると、教育のための費用はかからず、カンボジアの仏教では、出家をしても簡単に還俗ができます。そのため、仏教学校で教育を受けてから、還俗して仕事に就く人々もいるそうです。

セタリンさんは、CAPSEA の小学校から仏教学校に進学し、勉学に励んでいる教え子たちの近況を SNS で知るのがとても楽しみなのだと、満面の笑みで語ってくださいました。

お話が一段落した際に、セタリンさんは私に対して、「ニコニコして聞いてくれてるね」とおっしゃいました。発展途上国には教育を満身に受けられない子供たちがいるのは分かっていたつもりでいましたが、その現状についてしっかりと知り、彼らはどのような支援を必要としていて、私たちには何ができるのか、について考える機会はほとんどとっていいほどありませんでした。セタリンさんに教えていただいたことは想像を絶するもので、私は返す言葉が見つからず、とにかく誠意を持ってお話を伺うしかなかったのです。

セタリンさんは、聡明であり、正義感や、子供たちへの愛に満ち溢れている女性であると感じました。私には、彼女は恵泉の理想とする女性像のモデルのように感じられ、彼女のような人を目指したいと思いました。今回の訪問で実感したように、まずは「知る」ことが大切です。また、寄付金を手渡した際の「これでカンボジアの子供たちに沢山の教科書を届けられる」と喜ぶセタリンさんの姿に胸を打たれました。そして、私はセタリンさんにならう第一歩として、彼女から伺ったことをこの礼拝の場で、皆さんにも知っていただきたいと強く思いました。この感話でカンボジアの子供たちを支援したいと思ったなら、今日帰ってから、家にいない本がないかどうか、探してみてください。少しでも関心をもったのなら、すぐに行動に移してみるだけで、誰かの力になることができます。皆さんが積極的に、読まなくなった本を提供して下さり、古本市に来てくださることを、願っています。